

有機農業が地域コミュニティの再生に果たす 役割と課題

～活動参加者への聞き取り調査から～

西方 浩一*・中山 智晴**

Key Words : local community, organic farm, bioregionalism, permaculture

はじめに

現代の大量生産・大量消費・大量廃棄型の社会経済システムは、生産及び利潤の拡大を目的として成立するものであり、先進国あるいは開発途上国の中でも一部都市域の富裕層に巨額の富と財を提供し続けている。その一方で、先進国、開発途上国双方において、国土の広範囲を覆う農山村地域は高齢化、過疎化等により経済や環境、伝統や文化が疲弊し続けている。

グローバル・エコノミーにおいては、土地は生産を行うための工場という資本として捉えられることがあり、土地生産性を高めることに多くの努力が払われてきた。田畑は大規模な灌漑施設により水を供給し、大量の化学肥料を投入する「緑の工場」として取り扱われてきた。反対に、田畑として利用できないと判断された森林や湿地は経済的に無価値とされ、積極的に開墾・干拓して商業や工業地として都市化され活用されてきた。その結果、都市化社会では人口が過密し、都市生態系は破壊され、地域環境は劣化し続けている。さらには、農村地域においては休耕田の増大に見られるような積極的あるいは消極的な放置により農村生態系は破壊され、地域の自然、伝統・文化といった独自性を損失し、地域コミュニティの崩壊が起きている。本文では、空間的な広がりや「地域」、人の集まりを「コミュニティ」、それらが一体となり「地域コミュニティ」が形成されると位置付ける。

このような現状の中、世界全体の問題として市場経済のグローバル化による弊害を緩和するとともに、地域の問題として地域レベルで疲弊した経済やコミュニティ、生態系などの立て直

* 保健医療技術学部作業療法学科

** 人間学部コミュニケーション社会学科

しを図ること、すなわち持続可能な地域コミュニティの再生が緊急の課題となっている。

かつては、日本を含むアジアの地域コミュニティの形成に果たす稲作農業の役割は大きいものであった。田植えや草取り、刈り入れ、脱穀などの農繁期には、地域から農業労働者を雇用したり農家同士が労働交換を行い、多くの住民が地域コミュニティの構成員の役割を担っていた。地域コミュニティの構成員は相互に依存し全てが必要とされる社会を築き上げていた。入会地、里山、農業用水などは構成員の共有資源となっており、ローカル・コモンズとして利用されてきたため、資源の奪い合いによる枯渇という問題は生じることがなかった。

このような現状の中、私たちは地域住民と連携し、将来世代に安心して手渡すことのできる持続可能な地域コミュニティの再生を有機農業による稲作により実現する活動を始めて5年目を迎える。本活動は、田んぼを単なる植物の栽培場と位置付けるのではなく、里山の落ち葉を堆肥に利用する等の循環型社会の構成要素と考え、自然豊かな生物多様性に富むビオトープ田んぼを作り出すことを目指している。そして、その過程で健常者や障害者、子どもやお年寄りという立場・世代を超えた共生の原理が協働の下で培われていくことを目標とする取り組みである。

現在、本活動は地域活動家30名と地域の幼稚園児、障害者、高齢者、そして、その間をつなぐコーディネーターの役割を果たす文京学院大学環境教育研究センター所属の33名の大学生により実践されている。現在、私たちはそれぞれの立場の参加者が有機農業にどのような思いを抱き、どのような影響を受けながら活動を続けていくのか調査を進めている。

前回の報告（中山・西方(2009)）においては、環境教育研究センターが農と食を関連付け食農教育を展開している活動事例を報告するとともに、活動に参加する幼稚園児に注目し、食農教育が園児に与える影響について基礎的データを収集・分析し、食農教育としての有機農業の効果を評価するとともに、課題と今後の展開について考察を行った。その結果、活動に参加することで、「農」、「食べ物、自然への関心」そして「人と人のつながり」に関する子どもの意識は向上し、本来の食農教育の目的は大よそ実現できていることが理解された。また、保護者は食農教育の重要性を、「将来につながる体験」、「幼児期からの体験」そして「継続的な取り組み」と捉え、農業活動は「体験の時間的な連続性・継続性」が担保されているという点から高い評価を得ていることが分かった。すなわち、幼児が継続実施される農業活動に参加することは、幼児の心身の成長に大きく寄与する効果的な活動であり、有機農業は、地域内の再生資源（落ち葉など）を活用した自然の恵みを賢く使うことなどを理解させる効果的な体験学習であることが理解された。

今回は、持続可能な地域コミュニティの再生に果たす有機農業の役割と課題を調べる目的で、地域活動家への聞き取り調査を実施した結果について報告する。具体的には、有機農業を実施するに至った経緯、思い、そして将来への展望を分析する。報告の概要は、まずコミュニティ再生へ向けてのヒントを与える2つの概念を提示し、その後、活動概要、調査結果により得られたデータの分析、考察の順に述べることとする。

1. 持続可能な地域コミュニティとは

持続可能な地域コミュニティの再生に果たす有機農業の役割とはどのようなものなのであるか。

バイオ・リージョナリズムの説く自分たちの暮らす地域の自然を見つめ直し、その地域独自の自然に適応したライフスタイルを確立させるということは、暮らしを自然に合わせる生き方という点が参考となる。そこでは、地域内の資源を活用しながら地域の循環型システムを構築し、地域独自の自然資源や環境といった素材を活用した、持続可能な地域コミュニティを営むことが可能となる。

自然界の共生のメカニズム「連鎖・循環・流れ」から形成される共生関係をヒントに社会の在り方を考えると、そのひとつの姿として、食糧生産の場としてのみの農業ではなく、本来の「農」の再生・活用が重要であることに気付く。すなわち、農を食糧供給の場としてみるのではなく、生物多様性に富む自然資源として、持続可能な循環・共生社会の見本であると捉えることが大切である。そこには、子どもであれお年寄りであれ、健康者であれ障害者であれ、全ての人々に役割に応じた働く場が用意されている。

再生された田畑は、分断されていた奥山、里地里山、都市を有機的につなぎ多機能化を図る役割を有する。農村の生態系を整備し、都市域－農村域の人々の交流を活発化させ、農村に新たな交流の場を創出していくことで地域コミュニティを形成し、自然の恵みを豊かにする生物多様性に富む農村を支え合う地域づくりを進めていくことが大切である。

そのためには、奥山と都市域を結ぶ生物多様性の動脈となっていた里地里山や都市近郊農地では、地域の生態系に根付いた環境インフラを整備した上で、物質、エネルギー、人材等の適正な循環がなされ、自然を規範とする地域内の再生資源（動植物など）を活用した自然の恵みを賢く使う地域産業を発展させていくことが必要である。

農業を主体に地域コミュニティの再生活動を進めていく上で手本とする2つの環境保護思想がある。すなわち「バイオ・リージョナリズム」と「パーマカルチャー」について以下に概説する。

1-1 バイオ・リージョナリズム

生命地域主義とも訳される「バイオ・リージョナリズム」は、1970～80年代にかけて展開された思想及び運動である。もともとは地理学者や生態学者の研究から始まったものであるが、「ディープ・エコロジー」などの影響を受けて進化していった。「ディープ・エコロジー」では、その中心主題である「人間中心主義から人間非中心主義への転換」を遂げるための方法を精神的側面に関心を向けているのに対し、「バイオ・リージョナリズム」の思想では自分たちの暮らす地域の自然を見つめ直し、その地域独自の自然に適応したライフスタイルを確立させていくという具体的手法に関心を向けている点が特徴的である。

「バイオ・リージョナリズム」は、国境、県境といった行政的な境界で区切られた地域ではなく、集水域や河川流域といった生態的つながり、あるいは歴史や風土といったまとまりをもつ地域（バイオ・リージョン）の特徴や環境特性を保つための制約条件に、食糧、エネルギー、産業、交通などあらゆるものを人間側が適合させることにより、地域を持続的に運営していくとするものである。

環境問題に取り組む際に使われるスローガンに「Think Globally, Act Locally」がある。これは60年代にバーバラ・ウォードとルネ・デュボスという環境研究者が作った言葉だといわれている。環境問題を解く鍵は「Think Globally, Act Locally」すなわち「世界的な視点で考え、地域的な視点で行動すること」であるという。しかし「バイオ・リージョナリズム」の考え方では、むしろ「Think Locally, Act Locally」である。自分の住んでいる地域のことを十分に理解していなければ具体的な行動を起こすことができない、あるいは、行動を起こしても結果は出ないという見方をしている。地域ごとの問題解決の蓄積が、地球規模の問題の解決につながるのだというのである。大切なのは、「地球規模」で物事を考えたり「地域レベル」で考えたりすることではなく、両方の側面を視野に入れた「正しい」生き方を構築することである。「バイオ・リージョナリズム」において志向されるこのような生き方は「再定住」あるいは「リインハビテーション」とよばれている。日々の暮らしが地域と切り離されがちな現代において、再び地域に根ざすことが必要だと主張しているのである。

1-2 パーマカルチャー

「バイオ・リージョナリズム」の視点から、パーマカルチャーを実践する人たちが増えている。いまや、「ディープ・エコロジー」と並び環境問題への取り組みとして最も現実的な方法の1つとされている。

「パーマカルチャー」とは、1979年にオーストラリアの生物学者でパーマカルチャー研究所所長のビル・モリソンが唱えた「人間にとっての恒久的で持続可能な環境を作り出すためのデザイン体系」のことである（Bill Mollison (1997)）。パーマネント（永続的）、アグリカルチャー（農業）、カルチャー（文化）の複合語で、近代的な機能分化された暮らしを見直し、伝統的な農業の知恵と現代科学・技術の手法を組み合わせ、通常自然の生態系よりも高い生産性を持った「耕された生態系」を作り出すと共に、人間の精神や社会構造をも包括した「永続する文化」を構築することを目的としている。

パーマカルチャーは、植物、動物、水、土、エネルギー、コミュニティ、建造物など、生活の全てに関わる事柄をデザインの対象とし、生態学的に健全で経済的にも成立する1つのシステムを作り出すことで具現化していく。そのために、植物や動物の生態、そしてその生息・生育環境や人工建造物の特長を活かし、都市にも農村にも生命を支えていけるシステムを作り出していく方法を取る。

パーマカルチャーで用いられる具体的なデザインの一例を以下に示す（ビル・モリソン

(1993)).

- ①あらゆるものから排出される物質（ゴミ，汚濁水，し尿，廃熱など）を他のものにとって必要な物質（食料，肥料，暖房など）となるよう，すべてにつながりのある関係を築くこと。
- ②エネルギーや物質のインプットとアウトプットの流れは地域において循環し，このシステムから外へ漏れ出す物質を最小化する。
- ③動植物，建造物，道路など敷地内に配置される構成要素を，互いに孤立させることなく，互いに関連を持たせることにより，人間の移動等に要する余分な労力や資源消費を極力減らすこと。例えば，家屋を中心に，その周りには足を運ぶ回数が多い菜園や果樹園を設け，その周りにニワトリやウサギ，さらに外側にはウシやブタ，ミツバチなどを飼育する。最も外側には自然生態系と共生した自然保護区をデザインする（ゾーニングとよばれる手法，図1参照）。
- ④再生可能資源である動植物や自然エネルギーを有効に活用した適正技術を取り入れること。
- ⑤自然遷移の中で多様な植物を混栽的に育て，多様な植物を多様な時期に収穫できるシステムを取り入れること（近代農業は自然の遷移を止めて耕作や除草等に多大な労力とエネルギーを投入しているが，自然の流れに従う食物生産の方式を取り入れること）。

などを基本としている。

この運動はオーストラリアを中心としてアメリカやイギリスなど先進国での自給自足型のコミュニティづくりに発展し，さらには，ネパールやベトナム，アフリカでのNPO活動も展開されている。

<パーマカルチャーの基本要素>

- ①自然のシステムをよく観察すること。
 - ②伝統的な知恵や文化，生活を学ぶこと。
 - ③上記要素に現代科学・技術の知識を適正に融合させること。
- それにより，自然の生態系より生産性の高い「耕された生態系」を構築すること。

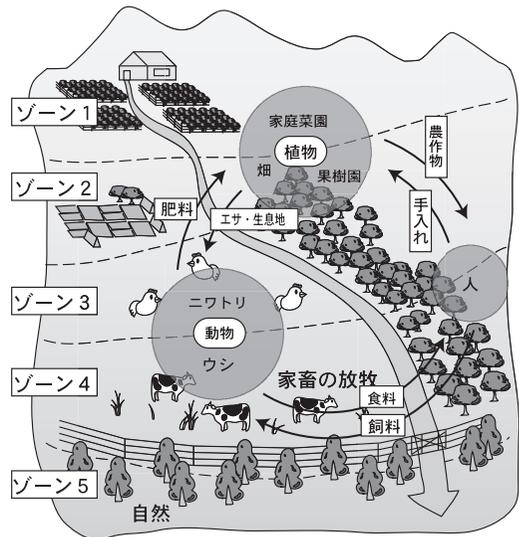


図1 パーマカルチャーの仕組み

2. 有機農業実践活動の概要

バイオ・リージョナリズムの基本理念を参考に、地域独自の自然資源や環境を生かした循環型社会や教育を確立すること、ならびに、パーマカルチャーの基本理念を参考に、耕された生態系、永続する文化を構築することを目的とし、当大学環境教育研究センターでは地域環境保護団体エコ田んぼビオトープNORA（以下NORAとよぶ）と連携、有機農業活動を実施して5年目を迎えた。

NORAは、2005年に埼玉県ふじみ野市駒林地区において地域の環境保護活動に興味のある方々20名程を母体として設立、運営されている団体である。有機農業により生き物の豊かな田んぼ作りを目指している。有機農業とは、自然環境や生態系保全と調和した農業の一形態であり、有機農法、オーガニック農法などともよばれる。化学肥料や除草剤を用いず、天然由来の無機物や天然の有機物を肥料として活用し、自然の仕組みを最大限に利用し農作物を生育させようとするものである。NORAでは、特に生物多様性を豊かにすることを最大の目的とした有機農業を実践している。

地元農家から無償で提供されている農地1000平方メートル（1.0反）において、冬も田んぼに水を張る冬期湛水を実施し、生物多様性の富む田んぼづくりを実践している。現在では、カモなどの渡り鳥の休息場所としてや、イタチやタヌキの餌場となっている。春にはカエルやドジョウ、ホウネンエビなど多くの生き物が姿を現す農村の原風景を垣間見ることのできる田んぼに育っている。

環境教育研究センターは、2006年からNORAの活動に参加し、地域住民との協働による農業が継続実施されてきた。2010年には、新たに0.5反の田んぼ（三角田んぼとよぶ）が地主さんから無償提供され、総計1.5反の田んぼの一部を環境教育研究センター所属の学生の自主耕作地に割り振ることが決まった。三角田んぼは十数年間耕作されていない休耕田であったため、稲を育てる環境づくりに多大な労力と時間が費やされた。また、2010年は猛暑の影響か田んぼには雑草であるデンジソウとアミミドロが異常に増殖し田んぼ全体を覆ってしまった。その除去（草取り）にも多大な時間と労力が費やされることとなった。

有機米作りの結果、化学肥料や除草剤を使用する周囲の田んぼと比較すると、実に多くの生き物の姿が今年もみられた。夏に実施された生き物観察会では昆虫類の生息が確認された。また、カエルなどの両生類、ドジョウなど魚類、ヒバリ、ハクセキレイ、トビやサシバなど鳥類、タヌキなど哺乳類も姿を見せるようになり、本来の農村がもつ食物連鎖が形成され生態系を取り戻していることが確認された。NORAの目指すビオトープエコ田んぼの目標の一つが確実に達成されていることを実感した。現在、年間を通じた田んぼ生き物調査を継続実施している。

便宜的、1年間を以下のように分類し、それぞれの季節に実施した有機農業実践プログラムの取り組み内容を概説する。

表1 年間を通じた田んぼを利用した有機農業実践プログラムの展開

冬 (1月から3月)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 用水工事のための材料運搬 ・ 畔の補強作業 ・ 塩水攪作業 ・ 落ち葉集め ・ 総会、講演会 ・ 農地活用の勉強会 ・ 収穫米によるおにぎりづくり
春 (4月から6月)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生による田んぼ紙芝居（お米のできるまで）の実施 ・ 月例会 ・ どろんこ遊び（代掻きの実施） ・ 代掻き ・ 畔づくり ・ 田植え ・ 幼稚園田植え ・ 種まき ・ 青空自由市 ・ 水苗代の整備、用水工事 ・ 畔補強 ・ 草取り
夏 (7月から9月)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 図書館、福祉施設での展覧会（園児の描いた田植えの風景） ・ 草取り ・ 看板付け ・ 生き物観察会 ・ ザリガニ取り ・ 幼稚園草取り ・ 案山子設置 ・ 黒米の稲刈り ・ 脱穀 ・ 幼稚園稲刈り ・ イセヒカリ稲刈り ・ 前夜祭で田んぼを飾る行灯の装飾用絵の作成 ・ 収穫祭（もちつき、田んぼ映画祭など）
秋 (10月から12月)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 福祉施設での高齢者への歌のプレゼント ・ 脱穀 ・ もみすり ・ 収穫祭 ・ 環境フェア（もちつき、生物多様性パネル、わら細工など） ・ 福島県自然農法研修ツアー

3. 地域活動家への聞き取り調査

NORAの活動に中心的に参加している人々に対し、どのようなきっかけで活動に参加し、どのような思いを持ちながら活動を継続しているのか、その過程で何を経験し、どのような将来展望を抱いているのかを明らかにすることである。最終的には、有機農業が地域コミュニティ再生に果たす役割と課題を分析し、その可能性について言及する。

3-1 方法と対象

対象は、主にNORAの活動に関わった、中心的メンバー6名である。対象の選定に当たっては、活動の主催メンバー、継続的に参加しているメンバーを抽出した。研究の参加に対しては事前に目的を説明し了承が得られた上でインタビュー内容を録音した。

インタビュー方法は、半構造化式とし、事前に作成したインタビューガイドに基づき実施し、ICレコーダーにて録音した。録音されたデータは逐語録を作成し、質的手法を用いて分析を行った。

分析の手順は、研究目的に照らし合わせその内容の意味する箇所をチェックし、その後チェックされた内容を要約する名前をつけた。それらの名前の共通する内容をひとまとまりとし、概念の生成を行った。さらに概念から共通しまとめられる内容をカテゴリーとした。それらを繰り返して、各概念、カテゴリーの関係を理論図として作成した。概念、カテゴリー生成に当たっては、2名の研究者により分析を実施し相互に確認し信頼性を担保した。

表2 対象者一覧

	年齢	性別	
Aさん	50代	男性	NORA活動主メンバー
Bさん	50代	男性	NORA活動主メンバー
Cさん	30代	男性	NORA活動主メンバー
Dさん	60代	女性	主要参加者
Eさん	30代	女性	主要参加者
Fさん	10代	男性	主要参加者

3-2 インタビューガイドと分析結果

3-2-1 インタビューガイド

1. 皆さんがエコ田んぼビオトープNORAの活動を立ち上げようと思った理由、あるいは参加しようと思ったきっかけについて教えてください。
2. NORAの活動に参加する前と参加した後の活動に対する意識の変化について教えてください。
 - 1) 皆さんにとってエコ田んぼビオトープNORAの活動に参加することはどのような経験になったと思いますか？
 - 2) 活動に参加してよかったことは何ですか？
 - 3) 活動に参加して大変だったこと、苦労したことはなんですか？
3. 幼稚園児、とんぼの会、大学生などの活動参加についてどう思われますか？
4. 今後のNORAの活動をどのように発展させていこうと考えていますか？

3-2-2 結果

分析の結果、表3に示すように、5つのカテゴリー、4つのサブカテゴリー、26の概念を得ることができた。サブカテゴリーは〈 〉、概念は< >で示す。これまでの農体験、田んぼや世の中への思い、行うことで得た実体験、更なる展望などが抽出された。これらの詳細を以下に示す。

(1) これまでの農との関わり

活動実施者は、子どもの頃の農との関係や過去の農とのマイナスの体験を回想していた。
 <子どもの頃の身近な存在>

子どもの頃の農との関係は、身近な遊び場や経験として残っていたり、映像として残っている存在であった。

表3 分析結果

カテゴリー	サブカテゴリー<>	概念<>
これまでの農との関わり		子どもの頃の身近な存在
		農に対するマイナス体験
田んぼや世の中への思い		昔の田んぼとの違い
		社会状態への関心と違和感
		体験重視の経験への価値
		生き物への関心
		農や食への興味
活動の始まり		口コミ・昔からのつながりでの始まり
行うことで得た実体験		普段できない体験
		農家との関係
		生活への影響
		常に気にかけるもの
	有機農業の困難さ	草取りなどの周辺作業の困難さ
		想像と体験の違い
	畑と異なる自然と癒し	水中生物との接点
		自然物の美しさを感じる
	エコ田んぼの持つ特性を感じる	手作業ならではの作業工程と種類の多さ
		年間を通じ、ずっと続く作業
		共同で行う作業の多さ
交流の拡大の喜び		街中のアクセスのしやすさ
		世代を超えた人とのつながり
		万人が参加可能なネットワーク
更なる展望		共同作業ゆえの交流への影響
		収穫物の販売
		農村文化の維持・発展
		交流範囲の更なる拡大

—私の場合はね、風景としてあったんですよ。あの～、なんていうかね、原風景というか、あの～農家の親戚がなかったし、うちも農家やってたわけじゃないので、あの～自分の中に原風景としてその、ずっと新潟っていうのは、永遠にこう黄色い稲穂がず～っとね (Dさん)

—田舎が九州のほうなんですけど、あの子どもころは田んぼが裏だったんですよ。それで、田んぼ遊んでたんですよ。で、え～、生き物いっぱいいて、で、子どもは遊び場だいたい田んぼだったんで、それで過してきて (Cさん)

<農に対するマイナス体験>

過去の生産中心の農業の体験を辛いマイナスの体験として捉えていることがあった。

—本来の農業の楽しさとか、そういうのってのは、たとえば今だったら有機農業とかやってるわけだけど、関係ないんだよね。化学肥料どんどんまいて、で、あの～、そういうなんていうの、生産があればいい、っていうような考え方であの、やってるから、農業そのものの楽しさとか、そういうのはあんまりやっぱり関係なかったんだよね。 (Bさん)

(2) 田んぼや世の中への思い

<昔の田んぼとの違い>

自分自身が知っている田んぼの状態と現在目にして田んぼの状態を比較していた。

—こっちのほうに出てきて、で、田んぼってどんなんだろうとか見たら、全然生き物いないんですよ。ほとんど。だから、あ、こっちの田んぼはあまり生き物いないんだなって、(Cさん)

<社会状態への関心と違和感>

障害、高齢、環境など社会が目当たりになっている現実に関心と違和感を持ちそれらへ働きかけたいという思いが存在していた。

—それがやっぱり機械化…ね、機械が導入されて、あの～働き手は男で、そう女でもやっぱりある程度若い人…。で、やっぱり年寄りはいなくなってきたのかな～って。で、それから障害者が出る幕もないですよ～。(Dさん)

—くぬぎ山のダイオキシンの問題にちょっと関わってて、でやっぱりあの環境のことについて色々あの～、考えたり或いは行動したりしてたんですけども、そういう中でやっぱり自分たちでも、こ～う…農作業をして、いかにその～なんて言うのかな、第一にあの野焼きがダメだとかねそういうことじゃなくて自分たち自らが環境をこう作り出すことをやってみたいなっていうのが前からあったんですよ。(Aさん)

<体験重視の経験への価値>

田んぼの良さは、見聞きすることよりも実際に体験し感じる方が良いことであると感じていた。

—自宅のところにちょっと裏の方だけにあのほんのちょっとだけ田んぼっていったらいいんですか、田んぼじゃないや、あの畑？うん、トマトとか何本かずつ植えてってその程度のことをやって、やっぱり採ったものはおいしいな、とかっていうものはやっぱり実感としては持っていたので、(Eさん)

—うん、そういうのは実際にやる方がやっぱり子どもにとっても体験になるなあっていうのはあったので、行きたいなっていうのはあったんですね。あの、うまく言えないからもう実際に行っちゃえみたいな。(Eさん)

<生き物への関心>

田んぼに生息する生き物への関心を持っていた。

—う～んあのその、こういうの、生き物が好きでこういうのも結構生き物がいるので、それで (Fさん)

<農や食への興味>

元々の農や食に関する興味を抱き活動に参加していた。

—やっぱり常々あの～食に対しては、子どもを育てるころにかなり気をつけてきました。それでやっぱりせつかくいいものっていうのは、高いものによるんじゃないで、体にいい食べものを自分たちがいただくには、できれば作ることから参加できたらいいな～っていう思いがあって (Dさん)

—でも元々なんかこういう農作業とかなんかっていうのはあの～、収穫とか、どっかで田んぼでやるよ、とかってのに行くのが好きだったのでとりあえず行ってみようかって話して子どもも興味持ったので来て (Eさん)

(3) 活動の始まり

<口コミ・昔からのつながりでの始まり>

活動の始まりは、昔からの顔見知りのつながりから、職場の同僚など口コミを中心に発展していった。

—仲間についてはうん、さっき言ったようにダイオキシンやってたような人とか、あと生協でやっぱり食の問題にそう關心あるようなあの～、けっこう人もいて、であとはまあ友達関係ですね、地域だから、で友達で、僕がやってるから「ちょっと私もやってみたいわ」みたいな感じで、(Aさん)

—昔からの僕の友達、で、実はこんなことやるんだけどやってみない?っていう感じで、それじゃあならじゃあ私も参加したいわっていう方もいますし、あの～みんな口コミなんですよ。結局それぞれが、それぞれのあの知り合いに声をかけて、(Aさん)

(4) 行うことで得た実体験

<普段できない体験>

普段では体験しえないであろうと考えていた田んぼづくりや、泥の中に入るなどの通常できないことをできる体験として思っていた。

—自分がこういう食に、ねえ、ものを作ることに関われる、まして農業っていうのは私やるなんて思ってたなかったし、せめてまあ、畑でねえ、トマトを作ったり、きゅうりを作ったり家庭菜園ぐらいたらろうと思っていたんですけど、こういうお米を作るなんて・・・で (Dさん)

—田んぼってホント、畑だと土の上じゃない、だから普通でも経験できるじゃないですか、なんとなく、でも田んぼって泥の中まで入って、(Eさん)

<農家との関係>

活動者たちは専業の農家として田んぼをやっているわけではなく、専業の農家からどのように見られているのか、配慮を考えていた。

一周りの田んぼは普通の農家ですから、そういう人たちがどういう風に考えてるのかっていうのはちょっと分かんないですね。まあ来れば普通に挨拶程度はしますけど、非常に変わったことをやってるわけじゃないですか。だからどう見られてるのかなっていうのはありますね。（Aさん）

<生活への影響>

いくつもの田んぼの事を抱えている場合は、自己の生活そのものが田んぼ中心の生活になっていた。

一日常が田んぼの中心になっちゃったっていう感じですかね。田んぼの時期に合わせて、あの～苗作って、え～田植えして、草取りして、稲刈りして、脱穀してっていうのが、もう1年が田んぼ中心に動くように（Cさん）

<常に気に掛けるもの>

田んぼそのものの存在が、目の前にしても、そうでなくても気にかかる存在となっていた。

—ここで苗を作っているときに、全然あの、芽が出てこないだよ～、何日も何日もさ～（笑）。で、ここで、本当に出るのかな～って思って、だけどある日来てみて、ほんのちょっとだけ緑の先っぽがちょこっとう出て、で、それがどんどんどん育って。だからこう、子育て・・・（Bさん）
—あの作柄がどうか、それからあの～気候がこのちょっと台風がきそうになれば、ものすごく心配になるとか・・・。（Dさん）

<<有機農業の困難さ>>

<草取りなどの周辺作業の困難さ>

有機農業ならではの草取りなどの田んぼを整えるための周辺作業の大変さを感じていた。

Q: 稲刈り大変だな～とか、そういうのありますか？

A: 田植えが一番（Fさん）

Q: あ～！田植えが一番大変でした？

A: はい。草取り、あの草取りとかもあ～（Dさん）

<想像と体験の違い>

頭で想像する有機農業と実際に体験して感じることでできる大変さは異なるものであり実感としてあるものであった。

—自然保護型の農業とかっていうような形で、頭で考えてたことが実際にはものすごくやっぱり難しいということをあの～、4年やって、今もやっぱり思うのね。(Bさん)

—最初から最後までのコメの育ち方っていうのかな、そういうのを子供が体験することですごく、なんというのかな、大変なんだなっていうのをやっぱり実感したかなって。(Eさん)

《畑と異なる自然と癒し》

＜水中生物との接点＞

畑では見かけない、水中生物との接点を感じていた。

—だから水の生き物とのかかわりっていうのが増えますよね。ここでドジョウとかザリガニだとか諸々？うん、うん。田んぼ、畑だと本当、陸上の虫って言ったらいいですか？しかないけど。(Eさん)

＜自然物の美しさを感じる＞

畑ではない、田んぼの持つ水や風景を見ることで心の落ち着きになっていた。

—田んぼってほんとね、美しくって、で～稲をあの～田植して、それからあの～段々こう緑が濃くなっていくに従って、その時々ね、美しさがあるんですよ。で秋は秋でね、収穫前で、こうやってはざかければ、農村の風景が。(Aさん)

—その～癒されるような、ああいう田園？風景みたいなのが味わえるっていう。心の中でこう・・・僕らなんかは小さい頃の、近くの田んぼの風景がこう蘇ってきますね。ですごい見てて飽きないし、やっぱり自分の心の中もすごい、あの～、豊かになるっていうか落ち着いたそういうイメージがある。(Aさん)

《交流の拡大の喜び》

＜世代を超えた人とのつながり＞

仕事の仲間や同世代を超えた人とのつながりを得られることに喜びを感じていた。

—やっぱり、人のつながりがすごい広がりますよね。あの～、自分の仕事仲間にはいない人たちがいるんで、だからそれぞれの職業からこういうことがあってなんて話が出てきたりとか、で、私より上の方のほうがやっぱり多いんでやっぱり経験は豊富ですので、いろんな話とか？なんかごちゃごちゃ言いながらその合間合間で話に出たりとかするのがあるんで、そういうのはすごい。(Eさん)

—近所でも仕事してるとそんなに昼間いないから結局関わらないから、そう言う意味で本当にすごく色々な世代と～、うん、いま、今の自分、今の年代から見るとすごい広がりをもって、関わってるのかなって。(Eさん)

<万人が参加可能なネットワーク>

年齢、障害など様々な区別なしに参加できるネットワークを有効であり面白みとして実感していた。

—自分たちだけで自己満足してやってるんじゃなくて、あの、地域の中でこう一つの広がりを持ちながらね、で、あの、お互いに影響され、影響するっていうか、そういう関係があの、できてきているみたいなことがね（Bさん）

—こういう風な従来型の農業をやることによって、色んなその～障害があったりそれからお年を召したりとかいう人も、あるいは若くても、小っちゃいお子さんでも参加できるっていうその～なんていうのかな一つのコミュニティーみたいのがそこで生まれるっていう、ことが一つあのやってみてすごい面白かった。（Aさん）

<エコ田んぼの持つ特性を感じる>

<手作業ならではの作業工程と種類の多さ>

機械を導入しない旧来の有機農業であるからこそその作業に工程や種類の多さが生まれていた。

—手刈りだし、田植えも手で植える。そうすると子供もできるし、お年寄りもできる。で、どんなそのえ～、体力がこう、いっぱいある人となない人も色んな人がいるじゃないですか障害もある人もいるし、でそういう人たちもその～なんていうの？それによって、そのそれに応じて、関わられる農業なんです。（Aさん）

<年間を通じ、ずっと続く作業>

年間を通じて作業があり、かつそれが繰り返され、終わりが無いという田んぼの持つ特性を感じていた。

—年間を通じて作業があるから学生とかいろんな人たちがちょっとずつ関わられる。みんなで関わられるっていう。（Cさん）

—まあ今回の失敗はまた来年教訓にして活かせるんで、そのへんが、まあ大変だけど、次にまた来年もまた、あの田んぼ始まる。（Cさん）

だから、終わりが無いんですよ。これエンドレスなんですよ。

<共同で行う作業の多さ>

畑とは異なり共同で、皆で行う作業の多さを感じていた。

—畑は一人の作業ですからね。なかなか共同作業というのは・・・でも田んぼはやっぱり共同してやらなければいけないし。水の問題もそうだし。(Cさん)

—こういう昔ながらのやり方をやってるっていう、だから手で植えて、手で刈って、で、できるだけあの、大きな機械を使わないでっていうことでやってることで、あの、子どもから老人まであの、いっしょに作業ができるっていう・・・ま、この田んぼのやっぱ特徴だと思うんですね。色んなことをやってる色んなグループがあると思うんだけど、やっぱりこういうやり方をやってるから、ちっちゃな子どもからお年寄りまでみんなが(Bさん)

<街中のアクセスのしやすさ>

街からのアクセスしやすい立地条件があることにより、交流のしやすさがあったと感じていた。

—やっぱり街の中にこういう田んぼがあるっていうのがね。田舎だったらあるけど、町の人達がすぐ来られて、交流できるフィールドに田んぼがなってるっていう(Cさん)

<共同作業ゆえの交流への影響>

共同作業が主であるがために、交流が生まれ面白みがあると感じていた。

Q: 田んぼのほうがみんなで作らないと

A: と成立しないから、それが大変だし、面白いし、交流ができるし。畑はなかなか個人作業ですよ～。(Cさん)

—参加できて交流しながらやっぱりやれるっていうのは農業の・・・しかも昔のやり方の農業をやるが故の幅広さっていうか。(Bさん)

(5) さらなる展望

<収穫物の販売>

将来的には、収穫できたものを地域の商店街を通じて販売し、町おこしにつながればと考えていた。

—ジャケット-商店街とかでその～、まあここの作物なり、あるいはこう地域のまあおじいちゃんおばあちゃんがくっついているそういう地元・・・とか加工物、農産加工物なんか販売できるような場所を作りたっていう風に言ったりしてるよね。(Bさん)

—今会員しかお米配れないじゃないですか。これを一つのなんていうの地域ブランドっていうかそういうものにして。(Aさん)

<農村文化の維持・発展>

農村で行われていた再生利用や、景色として農村文化の維持や発展を思っていた。

—今日もあの～Dさんが草鞋、この～これで草鞋作りましたけど、やっぱりこの～単に〇〇（聞き取り不明）だけじゃなくて、やっぱりこういうものを使って昔あった農村文化、をみんなでやってみたい。（Aさん）

—僕の夢は、やっぱこの一帯、この一帯をね、僕らがやって、ここ一帯が冬水田んぼになって、冬もこう水がね全部あって、で、鳥がいっぱい飛んでくるっていうそういうね、あの～、田園風景というか、こののを作れたらいいと思うけど。（Bさん）

<交流範囲の更なる拡大>

今後さらに隔たりのない交流を拡大できることや意識変化につながる参加が増えればと考えていた。

—本当に隔たりになく、色んな人とあの、関わり持てればいいな～というのはありますね。（Eさん）

—今後ね、いろんな人がいろんな参加の仕方があって、そしてその中から意識変化が生まれていくっていうことも一つの、意識のある人がまあ、もともとここに集約してきましたよね。でも、まあ、そういうこの場が今度は逆に、あのただ、ちょっと楽しそう、面白そうっていう風に来た、参加した方が意識変化をしていけるんじゃないかなと思う。いろんな人の参加によって。（Dさん）

3-3 調査結果のまとめ

表3を参考に、図2に示す結果図にまとめ、分析結果のストーリーラインを述べる。サブカテゴリーは< >、概念は< >で示す。

伝統的な有機農法を用いた地域での田んぼ作りを経験した人々は、元々<子どもの頃の身近な存在>や、生産重視の農業体験などの<これまでの農との関わり>を持っていた。また<田んぼや世の中への思い>として、昔、遊んでいたような田んぼの存在がないことや現代の障害者、高齢者などの弱者の社会的状況や、環境に関心を抱いていた。さらに以前から食や農、生物に関心を持っており、体験することが重要であると感じていた。

活動自体の始まりは昔なじみの知人や職場の同僚などから始まり、主に口コミを通じて参加することから始まっていた。

田んぼの活動を通じて得た体験は、<普段できない体験>であると同時に、<草取りなどの周辺作業の困難さ>と<想像と体験の違い>などの<有機農業の困難さ>を体験するものであった。これまでは、身近でありながらも実体験として感じ得なかった難しさを感じることに、単純に環境に対して悪い影響を与える農業や生産方法を、非難することはできないと考えていた。

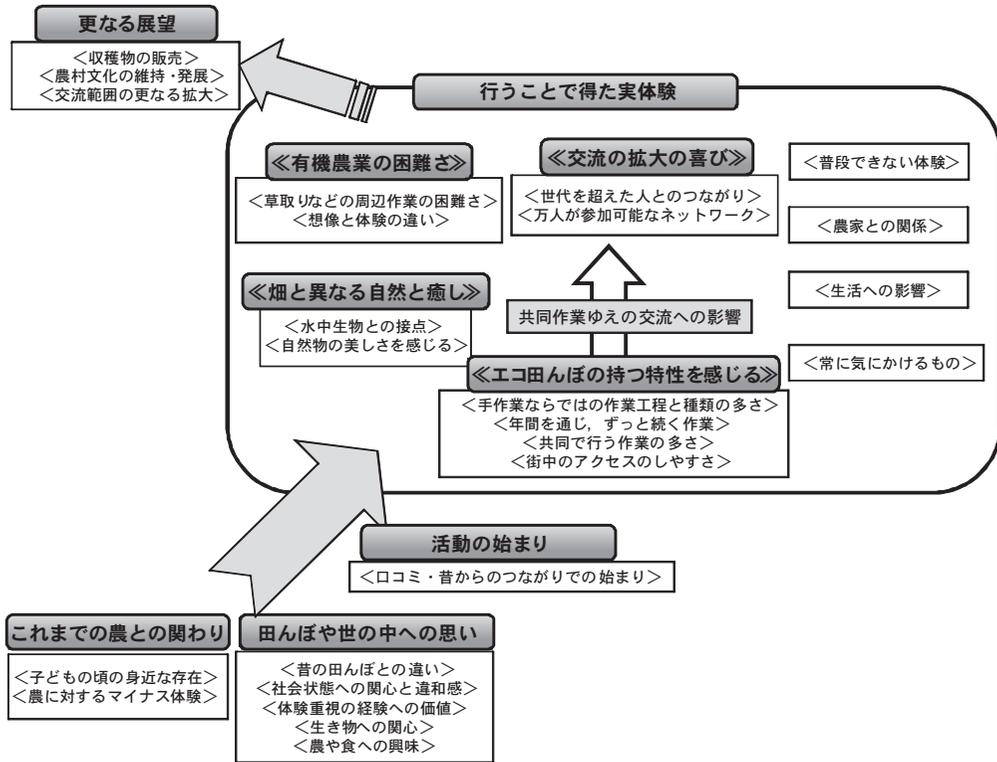


図2 カテゴリー関連図

また田んぼ本来の持つ《エコ田んぼの持つ特性を感じる》ものでもあった。これは<手作業ならではの作業工程や種類の多さ>や<共同で行う作業>であり、それらがあることで<世代を超えた人とのつながり>になり、<万人が参加可能なネットワーク>になる《交流の拡大の喜び》になっていた。伝統的な有機農法である機械を使わず手作業が中心であることで、近代の農法とは異なり様々な人が参加でき、様々な人の役割を生み、子どもから高齢者、障害者まで一緒に行える喜びになっていた。

そして、田んぼを行うことで《畑と異なる自然と癒し》を感じるものでもあった。例えば<水中生物との接点>を感じることであったり、田んぼの持つ四季折々の変化や、田園風景を思い出させる<自然物の美しさを感じる>ものであった。

しかし、これら続けることは《生活への影響》として田んぼ中心の生活にならざるをえない状況になることや、《農家との関係》を気に留めて配慮しなければならないことも挙げられた。

これらの実体験を通じて、今後は《更なる展望》として、<収穫物の販売>や<農村文化の維持・発展>の希望を持っていた。

参加者の多くが懸念していることは、農作業の機械化、工業化に伴い、働き手が変化したこ

とや、生き物の姿が極端に減少した結果、高齢者や障害者、子どもの役割、子どもたちの遊び場としての役割、伝統文化の継承の場としての役割など、多くの大切な役割が衰退していったことである。これらの現状に疑問と不安を抱き、世代を越えた人々との継続的なつながり、誰もが参加可能な社会的ネットワーク、そして生き物と共生する場づくりの必要性を強く感じている。

機械や化学肥料、除草剤に頼らない有機農業は、作業工程と種類が多く、年間を通じ誰もが何かしらの仕事に就くことができる。人手を必要とし、お互いが協力し支え合えば収穫には至らない作業であるといった「農への理解」が深まり、食の大切さを改めて実感している。「収穫の喜び」、「達成感」そして「多くの人との交流」という意識が参加により培われ高まることで、自らが楽しく参加でき、精神的にも向上していく。そして、他者と協働しながら達成していく過程を取り込んだ有機農業による地域づくり活動は、地域コミュニティ再生の可能性を秘めているものだということが分かった。

4. 有機農業が地域再生に果たす役割と課題

4-1 バイオ・リージョナリズムの観点から

本活動の特長には、自分たちの住み慣れた地域で、または関わりのある地域で自然発生的に活動が開始されたことに特徴があると言える。バイオ・リージョナリズムの観点で言うところの地域で地域特性を活用した実践活動が行われたといえる。その背景には元々の地域、社会問題に関心を持つ人々のつながりが発端となり、田んぼ作りを支援する農家の存在も大きく影響している。ネットワークの広がりには口コミ、知り合いを主に利用しており、元々備わっていた地域のネットワーク、さらには活動主体者のネットワークに頼るところが多かったと言える。これらの状況が他の地域で同様の形で、実施可能かどうかについては検討しなければならないが、地域の社会環境、自然環境に興味関心があり、地域コミュニティの再生活動を実践したい

表4 有機農業が地域再生に果たす役割と課題

役 割
自然を規範とする地域内の再生資源を活用した自然の恵みを賢く使う食農教育の場として有効である。
全ての人々に役割に応じた働く場が用意されている。
誰もが参加可能な社会的ネットワークである。
生き物と共生する場を作り出す。
課 題
活動の継続は地域住民だけでは困難であり、土地所有者や若い働き手（大学生など）など様々な連携が必要となる。
従来からの地域住民のつながり、口コミのみで活動を継続・拡大するには限界があり、田植え、稲刈り、収穫祭などのイベントをどのように活用するか、収穫物をどのように販売、啓蒙に利用するかなど、新たな方法を検討する必要がある。

という思いを持つ者と、活動場所を提供したいと思う者、両者をつなげ活動を円滑に遂行する役割を担う者、その三者をつなげる仕組みづくりが今後のネットワークを広げられるかの観点となる。さらには、生物多様性に富む地域を作り出すためには、地域住民だけでは困難であり、専門家、関係行政団体、NPO・NGO、土地所有者など様々な連携が必要となる。これらをつなぐ方法を単に地域住民のつながり、口コミのみで広げるには限界があり、それらを補う手法を検討しなければならないと考える。これまで、自然再生に関わる事例報告では、大学、企業の参加、イベントの活用など様々な手法が持ち込まれている。本活動も大学環境教育センターの参加、協働や、幼稚園児の参加など広がりを持たせているが、今後のさらなるネットワークの拡大を目指すためには、現状で実施されている田植え、稲刈りや収穫祭などのイベントをどのように活用するか、また収穫物をどのように販売、啓蒙に利用するかなどが課題として挙げられる。

4-2 パーマカルチャーの観点から

実践活動家たちは、実際の作業を経験することにより、本当の意味での農業の難しさを実体験していた。これは、傍から見る有機農業ではなく、体験に基づく実感である。農薬や化学肥料を使用しない農業は草むしりの労力や水を引くための井戸づくりなど想像とはかけ離れた困難さを実感したと言える。それらは実感する前に抱いていた、現在の機械化された農業への見方とは異なり、改めて生活の糧として働く農家への見方を構築するプロセスだったと言える。これらの視点は単に機械化イコール環境に良くない農業という視点ではなく、どのような形で取り組みが必要なのかを考える機会を与えるものであると考える。

また困難さのみでなく伝統的農業の良さを感じている。伝統的有機農業の特徴である様々な作業の存在が、様々な立場の人に役割を生じさせ、参加を可能にしてきた。

これらは数十年前までは、当然のように目にしていた農村の手法であり共同体としてのあり方であった。これらも現代に住む人々にとっては、日常の生活の中では感じ得ない伝統的な知恵や文化、生活を学ぶことである。現代社会で見過ごされてしまうことの多い、弱者と呼ばれる高齢者や障害者などの参加を可能とし共生社会を作り上げる一つのヒントになっていると思われる。

おわりに

地域コミュニティの再生には、地域活動家、企業、大学など地域の構成主体が、それぞれの立場で積極的に関わっていく必要がある。そして、各個人は地域への責任をどう考えるのか、地域の課題解決を行政や特定のリーダーへ依存するのではなく、一人ひとりが主役となる場を作り出し参加することが重要である。

地域コミュニティの再生には人的ネットワークづくりが欠かせない。地域には多様な見識を

持った個人や団体が潜在している。これら主体をどのように地域に関わりを持たせていくのが、これからの大きな課題である。人的ネットワークづくりは、誰もが必要とされる場づくりから始めることが効果的であり、そして、身近で、気軽に、楽しくできる活動を基本に多様な主体がゆるやかに無理なく連携することが効果的である。課題は誰もが参加しやすい場を作り出し、誰もが参加するきっかけを得られる場づくりにある。その実現のためには、一人ひとりが地域を支える責務を担うという意思の共有と、自由で柔軟な組織運営のあり方を形成することが大切である。個々人の興味・関心と、各々が培ってきた多様な技能、能力を生かせる活動、そして、多様な主体の出会える場づくりがこれからの地域コミュニティ再生には必要なのである。

参考文献

環境省パンフレット「自然再生推進法のあらまし」（改訂版）

（http://www.env.go.jp/nature/saisei/network/relate/li_4_2/all.pdf, 2010.9.22 現在）

環境省自然再生ネットワーク（<http://www.env.go.jp/nature/saisei/network/>, 2010.9.22 現在）

中山智晴・西方浩一, 「文京・食農教育ファーム」実践活動の試みと参加園児への影響（2009）

文京学院大学人間学部研究紀要第11巻

ビル・モリソン他「パーマカルチャー農的暮らしの永久デザイン」（1993）農山漁村文化協会

Bill Mollison 「Introduction to Permaculture」（1997）Ten Speed Pr

福岡正信「自然農法わら一本の革命」（1983）春秋社

（2010.9.29 受稿, 2010.11.1 受理）